

らブランコ、砂場、平均木と次々に遊びをかえていく。始めはAが遊びの中に入れるようにという心づかいからAの好きなことをさせておいたので、これはよけいにAをわがままにしてみましたようで、Aがリーダーになっていないとすぐにやめたりぐずったり始める。幸いAはききわけの悪い方ではないので、「AちゃんがおにになりたいようにBちゃんもCちゃんもおにになりたいのだから、皆で順番にしましょうね。」と話す素直にうなずき納得したようである。

保育室では発表も非常に活発で、「泣くのは赤ちゃんなの。皆と仲よく遊ぶのがいい子なんだよ」とよく理解し、自分でもいっている。だんだんと私もAのみを重視しないで、全体のひとりとして指導していくようにした。

夏休みには、両親といっしょに海へいって元気にすごし、早く幼稚園が始まらないかと楽しみにしているという葉がききを受けとって、私もホッとした。

やがて、十月になると、大学生の実習時間が多くなって週に三日間となった。Aは

おとなが相手をしてくれる日が多いので、大喜びで、それがまたかえってわがままを起こさせ、おとなに遊ばせてもらえない日は、朝ぐずるようになってしまった。母親のいうことも素直にきかず、強情をはったり口答えをしたり、あるいは妹を泣かせたり、何かと反抗をするようになった。ある日、玄関でまた始めているところへ私が迎えにいき、今日は思いきって離してしまおうと考えて、泣きさわいだが母親に帰っていただきたい。結果は思いのほかよかつたように思われた。始めは泣きながら「ママ、ママ」と門の方を見て母親の姿をさがし、

むごいようにも思ったのであるが、五分もするとすっきり泣きやんでケロリとして絵をかき始め、友だちともニコニコしながらふざけている。私はAにはこの方法の方がさっぱりとしてよいのかもしれないと始めて気がついたのであった。

それから四か月、Aが登園後ぐずることはない。

もう、友だちともどんどん遊ぶ。Aのかく絵は、妙な型にとらわれて、だいたんに

筆が動いている。歌もはつきりと大きな口をあけてうたい、ニコニコしながら話しているのを見ると、いったいこれが「ママ、ママ」と泣き続けた子どもかしらと思うほどである。

(東京・感応幼稚園)

## 内気な子どもの指導

藤田よし子

入園後二か月、新しい子どもたちもや々と園の生活に馴れ、遊びも活発になる。

いつまでも集団生活になじめず、友だちと遊べない子どもは、入園まで家庭でおとなを相手に遊び、同年令の子どもと遊ぶ機会が無かったものに多い。近所の子どもと遊ばせると悪いことを覚える。外で遊ばせると危険だ、この子は身体が弱くて戸外遊びを好まないなどと幼児の欲求を無視して友だちとの遊びを禁じ、祖父母や母親が遊び相手になっていたものである。おとなばかりの環境で甘やかされて育った為、園での無口な意気地のない態度にひきかえ、家

庭ではわがままな暴君である場合が多い。

社会性の発達が遅れているのに反して知能や感情生活では進んでいる場合も多く、時には集団のなかでの自身のみじめな行動を必要以上に強く感じて、ますます閉鎖的な態度になることがあるから、一日も早く緊張をといて集団生活に入れるよう導かねばならない。具体的な方法としては

(イ) 適当な友だちを選ぶ

末っ子というよりひとりっ子に近いH君の家族は、両親と十歳も年令の違う兄の外に三人の女中さん。広過ぎる位の庭にはプランコも、砂場も、すべり台も、欲しいものは何でも買い与えられるが、いかめしい門構えと高塀は小さな友だちが遊びにくるのを拒絶しているように見える。体格もよく、自由画、貼り絵、粘土などの製作面では優秀性を発揮しているが、ことばによる発表は全然出来ない。遊びに誘うと赤面して固くなり拒絶の態度を示す。無口で優しく話しかけても返事が出来ずいつかみんなに劣等視された。

このH君に、三歳児のクラスから上って

きて園にもよくなれているNさんを友だちとして紹介した。Nさんは知的に優れているだけでなく親切な優しい子どもでクラス中に人気があり、指導性がある上に落着いて物静かであった。登園してから、ロッカーに鞆をしまし、タオルを吊す、連絡帳に印を捺すなど、付添ってきた家人に催促されながらしていたことを、Nさんに世話してもらった。H君は無表情ではあるが決していやがらず、サークルになった時や給食の時には隣同志に並んで当然という様子をしていたが、Nさんは人気があってみんなが隣りに座りたがるため、他の子どもたちがちょっとおさまらない顔であった。お話のときNさんのお手伝いのことを親切な行為として話してみたところ、世話好きな女児の中に模倣する者が出てきて、手洗について行ってやったり、庭に出るとき手をつなぐ者などH君に対する親切ごっこがはじまった。両親には子ども同志の遊びが大切であることを理解していただき、近所の友だちと出来るだけ遊ばせるようにさせ、クラスの何人かに遊びに行くようにすすめ

た。こうして自分の家で、自分の玩具を使って、遊びにきてくれた友だちと遊ぶことから始めて、次第に友だちとのつながりができ、園での同じグループの遊びに参加出来るようになった。砂場での遊びやままごと遊びに保育者も加わって、遊びがおもしろく発展し会話のやりとりがはずんできた時、さり気なく話しかけると案外すらすら返答できた。その後も遊びの場を利用してなにげない会話を何度か繰返すうちに、帰りの挨拶、朝の挨拶と次第に話せるようになり、喜んで登園するようになった。

衣服のぬぎ・着や、玩具の片付けなど、おんなの手がありすぎるために今まで自分でしなかったことを、出来るだけひとりですせるように願って、お使いや簡単な手伝いを頼むようはかった。翌年近所のいところが入園してきたので、往復の世話をさせてみたところ、自信のある落ち着いた態度がみえだし、みちがえるように元気になった。

(ロ) 保育者に親しませる

三歳女児のAさんは色白で見えるからに弱々しい。はじめて登園した日、付添いと別

れにくくて泣き出したのを抱き取って、見かけよりも一層軽くて細いのに気付き、ふと、「こんな小さな虚弱な子が続くかしら」という考えが頭を掠めた。家族は祖父母に両親と妹、祖母が神経痛で身体が不自由なところへ赤ちゃんが生まれたので入所したのが、家人のみなの頭に「団体生活は早すぎるのではないかしら、小さいのにかわいそうだ」という考えがあるようだった。一日目の大泣きから考えると意外な程早く付添いを帰せるようになり、素直ででき訳けはよいが、不安なおどおどした態度で保育者の後を追ひ、絵本や積木で遊んでいても保育者がぬけるとすぐやめてしまう。友だちがちょっと押した。部屋に入ろうとしたらドアが風で閉まったというような何でもないことにもすぐ泣き、してほしい事や困った事があると口で言えないでわっと泣いてしらせていた。入園して一週間程たったAさんがまだ一度も園の便所へ行かないことに気づき、話してみると家庭では小児用便器を使っており、園の便所が恐くてがまんしていることが分かった。比較的明かるく、水

洗式で、他の子どもは水を流すのを喜んで使用していたのに、この子は水が出るからこわいということであった。あまりがまんをしていると病気になるし、水は出さないからと安心させて帰り際につれて行き、何度目かに抱いて用が足せた。皆と同じになるまでには更に一か月余りかかったが、あせらず少しずつなれさせていった。励ますことはしても決して叱らずに、根気よく毎日の用便の世話をしたことが、いつかAさんの信頼を得たようであった。

偏食はなかったが少食で、給食がはじまり、午睡がはじまると、これら新しいことの一つ一つが、また不安の種になった。保育者としては出来るだけ優しい態度で接するよう心がけ、頼みごとはなるべく容れてやる反面、ほめたり励ましたりして、少しずつ進歩するように努力した。二、三度家庭訪問をして親しい環境の中で好きな玩具を出していっしょに遊んでみた。この訪問は非常に喜ばれ子どもとの距離が急に接近したのが感じられた。はじめての子どもで園や保育者になじみがない上に、家の人が

何となく三年保育に対する不安を拭い切れない様子なので、園ではひとりひとりの子どもに適切な指導をしていること、無理な注文や不可能なことは決して要求していないことを、子どもにも、家庭にもわからせるよう配慮した。送り迎えの時、付添いの者に口頭で一日の様子を話すほか、ちょっとしたことでも進歩したこと、喜んでもらえることがある時は連絡帳に書き入れて家の人に見ていただき、ほめてもらうようにした。家庭では泣き声を聞いてから、あわてて世話しないで、どうして欲しいのかを口で言うように、話をした方が泣くよりもずっと早く処置してもらえらることを分からせる、また必要な生活習慣が自立出来るよう少しずつさせてみる、独りで出来ることはなるべく手伝わないように頼んだ。

園内気な子ども、依頼心の強い子どもは特に家庭における扱いに問題があることが多い。子どもを指導するといっしょに、両親や家族の指導が必要で、家庭の理解と協力が得られれば問題の解決は一層容易である。

(大阪・神愛保育園)